

【連載：「私の好きなこの一曲」 Vol.2】

一般社団法人日本オーディオ協会

会長 小川 理子

「ある現代作曲家との出会い、ある現代作品の共創」

林そよかさんという、若手作曲家の現代作品を演奏させていただく機会に恵まれた。2020年2月、大阪いずみホールでのバレンタインコンサートだった。もともと、関西フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者 藤岡幸夫さんにお声がけいただき、オーケストラとの共演は今回で4回目だった。

最初はガーシュインのラプソディインブルー、2回目はバッハのピアノ協奏曲第1番、3回目もガーシュイン、そして今回4回目が現代作品のピアノ協奏曲、それも世界初演。2回目のバッハのコンチェルトも相当難産したが、今回の現代作品は、ジャズでもなく、新しい領域の面白い共創の世界であり、本番ギリギリまで表現へのこだわりがあった。世界初演でありお手本もなく、自分の表現そのものをオリジナルとして世に出すという創作であり、これまでにない体験だった。

自分で曲を作って弾くのと全くレベルが違い、これから未来を切り拓く才能あふれる現代作曲家のピアノ協奏曲第1番を音として実在させるという責任、作品を音楽として世に出し、弾き続けられる、聴き続けられる、その第1歩を担うという責任、ある意味、自分がその役割を果たすことの使命を感じながらこの1曲に取り組んだ。

そのタイトルは「Cosmos High」。

哲学的には調和という意味がある。作曲家の言葉をお借りすれば、Sky High とよく言うけれど、それよりももっと高く、まだ見ぬ宇宙まで皆でいってみよう、という。現代版新世界のような、新たな発見、ワクワクする未来、そんなキラキラしたものがつまっている。

通常、私の練習時間には制約があるため、林そよかさんには、完全に出来上がる前の段階でいいので、できた部分からスコアを送ってほしい、とお願いし、最初に送られてきたのが2019年8月。本番が2月なので、バックキャストで、12月初旬には難度の高そうな1楽章と3楽章をある程度暗譜して弾けていること、2楽章は弾きこなすというより表現力がポイントであり12月1か月で完了すること、年が明けて1月は自分の表現にするためにとにかく弾きこなし、アドリブソロの部分は本番ギリギリまで発想をオープンにしたままインプロビゼーションを重視する、これを目標とした。

私のやり方は、譜読みでは、主題、主題の周辺、装飾、などなど、最初にグラウンドデザインがどうなっているのかという、統合的な空間認識から入り、それを全体設計図として、次に個別のパーツを音にしていく。あくまでも全体イメージはぶらさない。



そのかわり、全体イメージのフレームの大きさは、最適だと思えるゆとりあるものにしておく。あまりに構想が大きすぎて最後にまとまりがつかない、ということにならないように、制約のある自由、安定感のあるクリエイティブ、を強烈に意識する。そして、常に自分の構築する世界は、「品格と完成度」においてベストを目指す。

こんなふうに言葉にすれば格好いいが、結局のところ、練習でしかない。小泉信三先生が「練習は不可能を可能にする」とおっしゃったが、全くそのとおりだと思う。土日の練習は長時間にわたり、心身ともに疲れ果てる。アスリートか修行僧かと思えるほどだ。コンサート本番が近づくと、早朝練習、深夜練習も必要となる。日中の会社の激務に加えての練習は、「なぜ自分はここまで頑張るのか」と自分に問いかけるほどだ。答えは「文化や芸術を作り出すことは、人類の最も崇高な使命の一つ」。そういうことに関わっていること自体が、自分にとって「Cosmos High」なのである。

そして、企業活動も、社会文化、生活文化、を創り出す仕事。どんなに大変でも、一人の人間として、その役割を一生懸命果たすということが「生きる、生かされる」ということ。

さあ、これからの未来、様々な共創が楽しみでならない。